兵庫県

「守る」人になる

洲本市立由良中学校　二年
栗　悠希

私が住む町は水に守られている。毎日獲れる新鮮な海の恵みや、蛇口を捻れば流れる透き通った水。私の生活を取り囲み、水は当たり前のようにそれを支えてくれている。しかし、その供給はずっと「当たり前」ではない。水と生きることについて考え、私の見る世界は大きく変わった。

私はある日、国語科で水という資源についての授業を受けた。その授業で紹介された意見文は、世界の水不足について述べたものだった。最初その文章を読んだ時、私は「水が底をつく前に誰かがどうにかしてくれるのではないか」と事態を心のどこかで軽視していたが、私はその文章の中で、一つ気になる内容を見つけた。日本人は今、一人につき一日水二・四トン分の食材を無駄にしているというデータだ。大量の水を使って作られた食材が廃棄されることで、水の無駄が生まれるのだ。水不足の大きな原因に人間の水の無駄が関わるのは分かっていたはずなのに、あまりの多さに私は信じ難かった。その事実は、私の心に深く残った。

後日、私がいつも通り朝の仕度をしていた時だった。ふいに「今、起きてからどれくらいの水を利用したんだろう」と疑問に思い、私は手を止めた。朝ごはんに食べた食材を作るのに使われた水や、自分の着ている衣服を作るのに使われた水、そしてその時私の手には洗顔の為に汲んだ水が溜まっていた。その水は私の手をつたい、どんどん滴り落ちていっていた。このまま変わらなければ、水はいつか無くなる。こぼれていく水を見て、私はそれを初めて目の当たりにしたような気がした。

それから私は少しずつ水について関心を持つようになった。そして、私の住む淡路島は、昔から水が当たり前に使える島ではなかったことを知った。淡路島は河川が短く、降水量も少ない。そのうえ山林面積も小さいので保水能力がなく、明石海峡大橋を通して島外から水を供給できるようになるまで、たびたび断水などもあったそうだ。農業も盛んで、ダムや貯水池も多く、水に困るような生活はほとんどない今では想像もできなかった。一方で、今の淡路島の農業は連鎖障害を防ぐことができる生産循環システムを作り出し、それを具現化して水という限られた資源を有効活用しながら行われていた。自分の生活で使える水は十分にある。しかし、その水をいかに大事にできるか、私は考えたことがなかった。私は、私がすぐに水不足に対して出来ることについて考えた。生活の一場面で節水することや、自分の私生活の水の消費について考えること、身近な水の存在を美しく保っていくこと。大きな活動を通して大量の水を無駄にしないということは私には難しい。だからこそ、まずは目の前の一滴の貴重さを理解する必要があると思った。

私は身近な場面での取り組みをまずは家族の中で広げていくことにした。残食を出さないよう、作るご飯の量を調節したり、ごみを細かく分別してリサイクルに出したりすることで水を無駄にしない工夫をした。やってみることで、本当にわずかでも無駄が減っていっているという事実に達成感を感じた。

私は水と向き合ってみて初めて当たり前を「守る」のは、いつか誰かが作り出す技術や環境ではなく、今私たちに必要な行動を考えることではないかと思った。

自分の手からぼろぼろとこぼれていく水に、どうしようもなく不安と無力を感じた。しかし今はこぼれる水をどうすれば少しだけでも無駄にさせないか、考えられる。その意識は、私たちの使う水一滴くらいの力かもしれないが、それが私たちの生活を守る川や、海や、湖くらいの大きな力になれるように、私はこれからも水を守っていきたいと思う。